

金沢文庫蔵『浄土論注要文抄』撰者考
佐竹 真城

A study of the author of the
"Jōdoronchū-yōmonshō" (浄土論注要文抄) in Kanazawa Bunko.
Shinjo Satake

岐 阜 聖 徳 学 園 大 学
仏教文化研究所紀要第12号 抜刷
2012年6月

金沢文庫蔵 『浄土論注要文抄』 撰者考

佐竹真城

キーワード

金沢文庫

『浄土論注要文抄』

長西

問題の所在

現在、神奈川県立金沢文庫には、『浄土論注要文抄』（以下『要文抄』と略称）と仮に名づけられた一書が所蔵されている。本書は曇鸞の『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下『論註』と略称）の本文を短く「……等事」として項目立てにし、それに関して経論の引用や私釈を加えながら註釈が施されている。このことから、『論註』の註釈書であることが知られながらも、首題や撰号を欠いており、これまで研究者の間で十分に検討されて来なかった。

今日までの少ない研究によると、本書は法然（一一三三―一二二二）の門弟である覚明房長西（一一八四―一二六六）の著作と推定され、『論註疑芥』¹とか、『論註上巻釈』²などと仮称されている³。如上、様々に仮

称されるので、一見すると別々の著作と考えるが、諸研究の解説から判断して金沢文庫所蔵の『要文抄』を指していることは間違いない。ところが、残念なことに撰者を長西と推定するに至った明確な根拠が示されていないのである。しかし、諸研究が自分勝手に撰者を長西と推定しているとも思えない。

前述の理由から、筆者は以前、長西撰述書である『観経疏光明抄』（以下『光明抄』と略称）において『論註疑芥』に説いたと示される内容や、あるいは他の人師の『論註』註釈書に長西の説として記される内容が『要文抄』に見られないことから、本書をいわゆる『論註疑芥』と同一著作と見ることは誤りであることを指摘した^④。しかしながら、文体的特徴より長西撰述書である可能性を残していたから^⑤、内容面の検討が課題となっていた。

本稿では、念仏思想に焦点を当て、同時代に生きた諸師の著作および長西の他著作よりその特色を抽出し、『要文抄』の説示と比較することで、諸研究が『要文抄』を長西撰述書と推定することの妥当性を検討してみたい。

長西における念仏思想の特徴

まず、長西の念仏思想の特徴を見てみよう。

従来、長西の念仏思想は定善と散善、観念と称念に通じるものと理解しながらも称名念仏を帰結点とすることが知られ、それでもなお観念的要素を残すところに、彼の思想的特徴があると言われてきた^⑥。たとえば、『選択本願念仏集名体決』（以下『名体決』と略称）^⑦には、

念^{トハ}者能念^{ノ心ナリ}也。佛^{トハ}者所念^{ノ境ナリ}也。所^レ言^フ念^{トハ}者、依^ラ小乘^{ノ意ニ}大地法^{ノ心所}、依^ラ大乘^{ノ意ニ}

別境ノ心所ナリ也。又付^ニ念佛^一惣^{シテ}有^リ四種^一。一^ニ無相念佛^一、二^ニ有相念佛^一、三^ニ定心念佛^一、四^ニ散心念佛^一也。

〔浄全〕卷八・四四六頁上―下^⑧〕

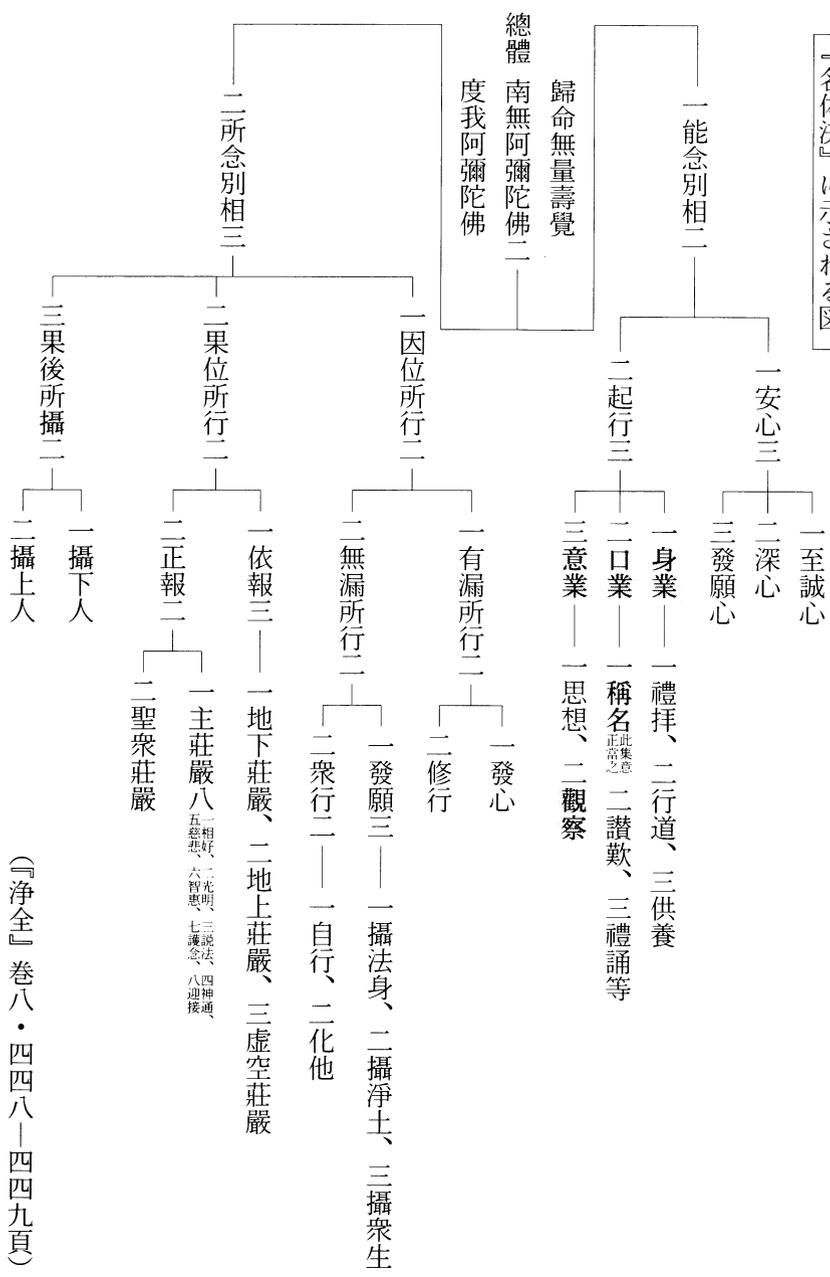
とあり、念仏の「念」とは能念の心、「仏」とは所念の境界であるとし、小乗の意では大地法の心所、大乘の意では別境の心所であると言う。そして、念仏を(一)無相念仏、(二)有相念仏、(三)定心念仏、(四)散心念仏の四種に分類している。安井広度氏はこの分類について、

浄土教は凡夫を本とするから無相の念仏を捨て、有相の念仏を取り、又、之に定散の二種ありとする、即ち散心を以て仏を念ずるは散心の念仏であり、定心を以て仏を念ずるは定心の念仏である。さて、彼は斯くの如く意地を以て念仏の体とするが：(以下省略)

〔法然門下の教学〕六一頁〕

と解説している。すなわち、長西は意地をもって念仏の体とすることが知られるのである。また、『名体決』には次のような図が掲げられている。

『名体決』に示される図



〔浄全〕卷八・四四八―四四九頁

これを見るとわかるように、念仏について口業の称名のところに割註して『選択集』の意は称名であることを述べてはいるが、その他に觀察をも認め、三業にわたる念仏を説くのである。この点、長西の独特な思想が表れていると言えるであろう。

如上、甚だ簡略ではあるが、長西の念仏思想における独自性として、主に観称二念に通じる理解と、三業にわたる念仏思想を確認した。以下、この二つの特徴を手がかりとして、検討を加えていきたいと思う。

通観称二念の思想を通して

東大寺の凝然（一二四〇—一二三二）が著した『浄土法門源流章』（以下、『源流章』と略称）には長西教義について、

前ノ十三観ハ是観行ノ観。修習定善思惟方便、正受觀成。三輩散善。臨終見佛眼開證境。是觀屬ノ觀。觀佛念佛。定散門異、得定證境。三昧是同。故觀佛念佛兩三昧爲宗。或約韋提請定善爲宗、約佛自開散善爲宗。由定善故二觀佛爲宗、由散善故念佛爲宗。二門互取互成一宗。如是等義即彼所立。

（『大正藏』卷八四・二〇〇頁下）

と述べており、観仏と念仏について、定善十三観を修習し、観行の観によって証得するのが観仏三昧、散善を修習し、臨終に見仏して眼開けて境界を得る、すなわち観属の観によって証得するのが念仏三昧であるとする。そして、この二種は定散の異なりはあるものの、相互に関係しあうから三昧としては同等のものであるとしている。だから、観仏念仏両三昧を宗とするのだと言う。すなわち、韋提希の請求に約せば定善を、仏の自開に約

せば散善を宗とするのであり、定善によれば観仏が、散善によれば念仏が宗となる。そして、この定散二門は互いに一つの宗と相成るといふ論理構造が、長西の打ち立てた義であるとされる¹⁰。

長西所立の義図示



ところで、観仏念仏両三昧を宗とするというのは、言うまでもなく善導（六一三―六八一）に既に見られる説示であるから¹¹、それを承けたものであることは容易に理解できる。それを一歩進めて、「互いに一宗を成ず」、換言すれば観称二念は相通じると主張したところに長西の独自性が窺えるのである¹²。このことは『名体決』にも、

問、定散ノ中ノ何レナルヤ乎。答、可通ニ定散ノ二義ニ。或ハ念佛三昧ト、或ハ云ニ口稱等ト、知レナリ
 通スルコトヲ定散ニ也。問、定散中ノ何レヲ爲スヤ正ト。答、約ニ法ノ淺深ニ以テ爲正ト、約ニ機ノ利鈍ニ以テ
 散ヲ爲スナリ正ト。

〔浄全〕卷八・四四七頁上

とあって、念仏が定散二義、すなわち観称二念に通じ、どちらを正義とするかは法の浅深・機の利鈍によって異なることが述べられている。ここを見る限り、長西の念仏思想は観仏・称仏に通じる理解であったと

窺える。

また、同時代に生き、長西との教学的関係も指摘される鎮西義第三祖の然阿房良忠（一一九九—一二八七）は『観念法門私記』において、

有ルカクハク云ハク、観佛モ念佛モ隨テ其ノ根性ニ互ニ成ニ助正ヲ。〈云云〉：（中略）：今云ハク、先師ノ意ハ不レ然ヲ。
今學ニ念佛者、令知二助正ノ義顯正定ノ義ヲ。非ニ唯行有ニ助正一、亦教門ハ顯ニ助正一。應レ云フ文、助業行ノ助業一也。

〔浄全〕卷四・二四六頁下）

と述べている。ここではある人の説として、観仏も念仏もその機根に随って助正どちらにもなるという義を挙げている。これだけではこの説が一体誰の説であるのかを知ることが出来ないが、良栄（一三四二—一四二八）が註釈を施した『観念法門私記見聞』には、

有云觀佛念佛等者、是九品寺義也。定散皆本願故、互隨機可レキナリ成助正也。言設ヒ並レ行スルニ觀佛念佛ト二行ヲ、機ノ意樂ニ觀思レ正ト、念佛ヲ思助レ時ニ互ニ可レキナリト成助正也。〈云云〉
當流意、何機ノ意ニ觀爲正ト念佛爲助ト。是不知二宗旨一行人惡得意ヲ社有レ、何レモ念佛ハ得正ノ名一、觀佛ハ可レキナリト成助業也。機ノ觀爲正ト僻事ノ行ナリ。機ノ僻ニ任セテ其ノ機ノ意樂ニ念佛ヲ許ス事ハ不レ爾ヲ。又上ノ義ハ一行宛行スル時ニ觀佛ヲ可レシト云フ正業ト許スナリ。非ニ云フ助正相對ノ正定業ト。但シテ可レシト許ス正雜相對ノ正名ト也。何レノ機ノ思レ行セント、何レモ正定業ノ名ハ可レキナリト限ル稱名ニ也。

〔浄全〕卷四・六六四頁上—下）

とあり、良忠が「有云」として挙げる説を「九品寺義也」と述べている。この「九品寺」は、周知のよう
に長西の流派名であるから、前の説が長西のものであると知ることができるのである。そして、良忠・良

宗ともに以下、「先師（法然）の意はそうではない」、「宗旨を知らない者が悪く意を得た」と、痛烈に批判・破折している。また、了慧道光（一二四三—一三三〇）の『選択集大綱抄』には、

問、或人ニ云ハク、彌陀ノ光明正レシクハ照シテ觀機ニ傍シテ攝ス稱者ヲ。所以ハ者何。疏ニ云ハク、五ニ從リ無量壽佛下、至ニ攝取不捨ニ已來、正明ニ觀身ノ別相。光ハ益ニ有縁。已上、其ノ有縁ト者指ス觀行ノ者。閣ニ能觀ノ機不レカニ照ニ攝ス稱名人ノ一故ニ。況ンヤ親縁ニ云ハク、心常ニ念スレハ佛ヲ佛ハ即知レリタマフト之ヲ。已上、口ニ常ニ稱ス佛外ニ別舉ク念佛ノ行。此ノ念佛ノ者指ス經念佛衆生ノ念佛。故ニ觀念佛義ナルコト在レリテ文明ニラカナリト也。云云、此ノ義如何シ。答フ、此義非也。違スルカ本願并ヒニ論ノ所判ニ故。疏モ亦不レ爾。

〔浄全〕卷八・四三頁上—下）

と述べられているが、ここに示される「或人」とは長西のことであると石橋氏は推察している¹⁰⁸。ここでは阿弥陀仏の光明が照らす正しき対象は觀仏の機であり、傍らに称念の者を照すと述べられ、その理由として、『觀經疏』に説かれる「有縁」の語は觀行の者を指すから、それを差し置いて称名の人を照摂することはないことを挙げてゐる。また、親縁釈には口称以外にも念仏行を挙げており、それは『觀經』第九真身觀の念仏であるから、觀念の義であると言っているのである。

このように、第三者の説からも長西が觀称二念に通じる理解であったことがわかる。しかしながら、前の『名体決』に見られたように、このような義を立てながらも、最終的には「此ノ集ノ意ハ者且ク局ニ稱念ニ、不レカト通観念等ニハ歟」¹⁰⁹と結んでいることから、『選択集』の意、つまり法然の意に従って称名念仏に帰結することが知られるのである。ただし、『名体決』で「此集意者」と述べていることを看過してはならない。これは翻って、「他では觀念等の意に説かれることもあり、その場合はその義を取ることもある」と主張していることに他ならないであろう。事実、『觀經疏光明抄』には、

又惣^レ二云^ハ、念佛^ノ之言^ハ廣^ク巨^ニ事理定散^ニ也。故^ニ隨^{ヒテ}說處^ニ可^キ得^レ意^也。

〔宗学研究〕卷一二・二二二頁

とあり、念仏という用語は広義であるから事理定散にもわたるのであり、説かれている箇所についてそれぞれ理解すべきであると述べるのである。すなわち、説かれている箇所によっては念仏に観念の義を含むことを許容することになると言っわけである。

これらの点からも窺えるように、観念を完全に廃捨しない態度には留意しなければならない。良忠と良栄とは、両者例外なくこうした長西の義を批判対象として厳しく難じているが、その異端とも言うべき特異性に、彼が独自に打ち立てた義が明白になっていると言えよう。

さて、上述したことを念頭に置いて『要文抄』を眺めてみると、以下のような説示に気づくことができる。

疑^ヒ二云^ハ、上^ノ憶念^ト與^テ此^ノ稱念^ト一人^ノ所具^{ナル}歟乎。答^フ、釋文^ノ面^ニ二人^{ナリ}也。意^ハ二云^ハ、經^ニ說^{ケリ}具足十念稱ナモアミタ佛^ト。付^キ此^ノ一文^ニ爲^シ稱名^ノ行者^ト、一人^ハ意地^ニ散^ス觀念^ト、二云^ハ之^ノ憶念^ト。一人^ハ只口^ニ唱^フ佛號^ト、二云^ハ之^ノ稱名^ト也。

(卷下・七七四―七七六行)

ここでは、「具足十念稱南無阿彌陀佛」を解釈して、意地に観念を散す者(憶念)と口に名号を称える者(称名)とを挙げている。「稱南無阿彌陀佛」の文言に、意地の観念を見出すことは、本書の撰者における一つの特徴と言ってよいであろう。

如上、称名念仏を主張しながらも、そこに観念を併説していることから、前に述べてきた長西の思想と非常に似通っているように見えるのである。

三業の念仏思想を通して

続いて、改めて『源流章』の記述に目を向けてみると、長西教義の特色が以下のようにも挙げられている。

所立ノ義ニ云ハク、念佛ト諸行トト、皆是彌陀如来ノ本願。隨テ所修ノ業ニ皆生ス報土ニ。…(中略)…第十八願ハ念佛往生、第十九願ハ聖衆來迎、第二十願ハ諸行往生。第十八ノ中ニ有リ三業念。

〔大正藏〕卷八四・二〇〇頁下

これによると、長西の教義は「念仏」も「諸行」も阿弥陀仏の本願であるとする。つまり、それぞれの行によって報土へ往生することを可能とする、いわゆる諸行本願義であったことがわかる。また第十八願を念仏往生の願とした上で、その本願念仏に「三業の念仏」があると説いたことも知られるのである。

今注目したいのは、「三業の念仏」である。『源流章』の記述からはその詳細を窺うことはできないが、長西の著作には紛れもなく三業の念仏が説かれているから、まずはそちらを確認してみよう。

長西の『名体決』には、

問フ、上來所レ論 觀稱ニ念ハニ偏ニ第十八願ノ所攝ナルカカ 歟。答フ、經文ハ且置ク、古來ノ論 故ニ。今依ニ善導ニ即有ニ二義。一ニハ通ニ觀念ニ、二ニハ局ニ稱念ニ。初ニ通ノ義トハ、弘誓多門ニシテ百四十八ノ偏ニ標ニテ念佛ノ最モ爲親ト、總ニ標ニテ第十八願ノ、人能ク念佛スレハ、佛還念、シタマフ。別開ニ指ニテ、口業ノ稱念ニ也。專心ニ想ヘハ、佛佛知リクマフ人ヲ。別開ニ指ニテ、意業ノ觀念ニ也。又禮讚ニ云ハク、彌陀ノ身色如ニ金山ノ相好ノ光明照ニ十方ヲ。所觀ノ境ニ也。唯、有ニモノニ念佛。三業ノ念佛。蒙ニ光照ヲ。能念ノ利益。當ニ知、本願〔第十八願〕最モ爲レト強ト。指ニ増上縁。故ニ知、所引ニ二文中ノ本願トハ、指ニサナリト第

『浄全』卷八・四四〇頁上)

とあり、善導の義によつて、第十八願の念仏が観念に通じる場合と称念に限る場合の二義を立てている。そして、観念に通じる義を説明するにあつて『法事讚』の文言を解釈する中で、称念を口業、観念を意業に別開して理解し、続いて『礼讚』の文言を解釈する中で、念仏を三業の念仏と定義づけている。また、『観經疏光明抄』には、次のように説かれている。

念佛言ノ中ニ有リ三業ノ念佛一。開レテ時、或ハ云フナリ五種正行一也。而シテテハ之ヲ觀佛ト念佛ト二一也。今閣ニキテ觀佛三昧一、勸ニムルナリ念佛三昧一也。故ニ念佛ノ言ハ廣クシテ、經ニ三業ニ巨ニルナリ定散ニ也。

『宗学研究』卷二六・一五五頁)

ここでは、「念仏」という言葉の中に三業の念仏の義があり、それは五念門や五種正行に換言できるとし、これを分けて考えるならば、観仏と念仏との二種であると言うのである。そして、このように念仏という語は広義であるから、三業を通して定散にわたると述べるのである。

両書に見られる記述から推するに、長西が主張する「三業の念仏」とは、身・口・意の三業それぞれに念仏を配当するものと見て大過ないだろう。しかしながら、そもそも「三業の念仏」という用語自体は、法然門下諸流において広く用いられるものである。故に、前述の三業の念仏理解が長西独自のものであることを証明しておく必要があるかと思う。よつて、以下しばらく諸流における用例を確認しておきたい。

まずは、鎮西義での用例を見てみよう。たとえば良忠が著した『選択弘決疑鈔』には、

親縁ノ中ノ口常稱佛等トハ、明三口稱行具ニ足ルニ三業一。口稱ニ佛ノ名號一即念佛ノ行體、故ニ先

擧レ之ヲ。稱名ニ行者、向レヒテ西ニ合掌スルハ、即ニ身敬ナリ。亦心ニ念スルハ、佛ヲ即ニ心念ナリ。是故ニ禮トハ、非ニ

別行^二也。

『浄全』卷七・二六〇頁下)

とあり、親縁釈の文言を解釈する中で、口に仏の名号を称えることは念仏の行体、称名の行者が西に向って合掌するのは身敬(身業)、心に仏を念ずるのは心念(意業)であるとするが、三業各々に念仏を認めるのではなく、称名念仏の上に三業を具足することを説いている。

また、了慧道光の『論註略鈔』には、

又更^ニ難^シレ^テ云^{ハク}、五念門^ト者皆第十八願ノ所誓^{ナルカ}故^ニ、以^テ三業ノ念佛^ヲ名^ニ五念^ト。謂^フハ作願廻向^ト是稱名ノ安心^{ナリ}也。禮拜^ハ是稱名ノ身業^{ナリ}也。觀察^ハ即稱名ノ意業^{ナリ}也。故^ニ引^キ第十八願^ヲ證^スス^ル五念佛往生ノ之増上縁^一也。何^ノ第十八願^ヲ但局^ニ稱名^一耶。答^フ、此ノ義^ハ非^{ナリ}也。

『浄全』卷一・五五八頁上)

とあり、五念門は第十八願に誓われるものであるから、三業の念仏を五念門と名付け、五念門のうち作願門と廻向門を称名の安心、禮拜門を称名の身業、観察門を称名の意業と、三業それぞれに対配すべきである。どうして本願念仏を称名念仏に限るのか、という外部からの論難^論に対し、「此義非也」と論断している。すなわち、了慧道光においては第十八願の念仏を三業それぞれに配当することは、邪義として理解されたことが知られるのである。

以上のことから、鎮西義における説示は、称名の上に三業具足する念仏ということができらるだろう。

次に、西山義での用例を窺ってみると、たとえば西谷義の行観(一二四一一三二五)が著した『選択集秘抄』には、

問^フ云^{ハク}、付^キ就^キ行立信^一、往生ノ行相^ト及^ヒ二行^ノ之得失^ト、二義ノ意^ハ何處^{ヨリ}釋出^{スル}ヤ乎。答^ヘ云^{ハク}、善

導ノ往生ノ行相ハ禮讚レ釋スニ、分別スルノ正雜ニ行ノ之得失一心地ヨリシテ、今就行立信ノ下ニモ可レ得ル有レ得テ釋出スルナリ也。付レキテ之ニ立テ正雜ニ行ヲ捨テ雜ヲ取リ正ヲ、正ノ中ニ立テララ五種一助正ニ分別シテ、以テ第四ノ稱名正定業ノ一行ヲ而往生ノ業ニハ定レメタリノ。但シフハ稱名一者、一切ノ人機ノ方ノ三業ニ唱ル名號ニ存ス稱名正定ノ業一。

〔浄全〕卷八・三六一頁下)

とあり、称名正定業を解釈するところで、衆生の三業に名号を称えることが称名正定業であると述べている。つまり、三業のそれぞれに念仏を修すのではなく、鎮西義と同様に称名一行に三業を含むという義であることが知られるのである。西山義においては、派祖の善恵房証空(一一七七―一二四七)が『白木念仏御法語』において、

所謂觀經の下品下生の機は佛法世俗の二種の善根なき無善の凡夫なるゆへに、なにの色どり一もなし。死苦にせめられて忙然となる上は、三業ともに正體なき機なり。

〔鈔物集〕二四二頁―二四三頁)

と述べて、凡夫の三業に正体が無いことを明かしている。さらに、

彌陀の本願は、わきて五逆深重の人のために、難行苦行せし願行なる故に：(以下省略)

〔鈔物集〕二四三頁)

とか、

南無阿彌陀佛と唱ところに、佛の願力ことごとく圓滿する故に：(以下省略)

〔鈔物集〕二四四頁)

などと述べているように、念仏は阿彌陀仏が五逆深重の者のために難行苦行した願行であり、衆生が称名すると

ころに仏の願力が悉く円満するというから、称名一行に仏の側の三業が摂められていると理解できるのである。

このように、鎮西・西山両義で説く三業の念仏思想と、長西とでは理解が異なることは明らかである。

これらの理解を踏まえて、『要文抄』における三業の念仏に関する説示を見てみると、

尋^{ネテ}云^{ハク}、故^{ラニ}引^{キテ}大經^ト觀經^トノ二文^ヲ爲^シレテ首^ト、共^ニ説^クレトニ衆生^ノ之證^ヲ、有^ルヤ何^ノ意^乎。答^フ、爲^レナリ
顯^ハ三業^ノ念佛^ノ中^ノ口業^ノ稱名^ヲ爲^ス本願^ノ正意^ト之由^也。其^ノ故^ハ、本論^以テ觀念^ヲ爲^シ正^ト、又分明^ニ
不^レ明^ニ稱名^ヲ。雖^モ爾^{リト}、上根^ニ勸^メ觀念^等、下根^ニ可^レ勸^ニ稱名^ヲ。而^{シテ}似^ト面^ハ觀念^ヲ爲^シ正^ト、裏^テ
顯^ニ稱名^ヲ爲^ス正^ト之論文^{ナリ}。最略^ニシテ不^レレトモ委^シカ^ラ、住文廣釋^{シテ}細明^{ナリ}也。

(巻下・六八九―六九二行)

とあり、「三業の念仏の中の口業の称名」と述べていることから、三業それぞれに念仏を配当していることが窺える。更に、『論註』の文が観念を正義として称名を明確に説いていないことについて、文面上は観念を正義とし、隠れた意としては称名を顕して正義とする文面であると述べている。よって、ここからも念仏が観念と称名とに通じると理解していることが見て取れるのである。しかしながら、「口業の称名を本願の正意となす」とあるように、称名念仏が主たることは明確であり、撰者の意図するところが果たしてどこにあるのか、非常に曖昧な印象を受けて仕方ない。

如上、三業の念仏を称名所具として語らずに身口意それぞれに配当する表現が見られる点、やはり長西の思想と近いように思う。加えて、三業の念仏を述べる上に観称二念に通じる理解が見られたことで、一層その可能性が高まったと考えるのである。

また、本書の撰者の思想には観念的要素が強く見られるが、最終的な帰結点を称名念仏に置いていることも、長西の思想に酷似していると言えるであろう。

結語

小論の内容を纏めてみれば、要点は以下の通りである。

- ①長西の念仏思想は、観称二念に通じる理解であるが、その念仏思想は同じく法然の流れを承ける諸師からの批判対象となっていた。
- ②『要文抄』にも、長西の特徴とも言うべき観称二念に通じる理解が看取される。
- ③また、長西は本願念仏に三業の念仏ありと理解するが、その意は身口意それぞれに念仏が為されるものである。しかし、それは他の人師と比較すると長西独自の特徴と言えるものであった。
- ④『要文抄』にも、同様に身口意それぞれに念仏を配当する記述が見られた。

以上、念仏思想を窺えば、従来より長西の思想的特徴とされてきた点と『要文抄』に説かれる内容とは非常に良く似ていることがわかる。もちろん、更に様々な視点からの検討という課題は残っているだろう。しかし、筆者が以前に指摘した文体の特徴と相まって考えてみた時に、本検討での思想的一致は、自ずと『要文抄』の撰者に関する重要な示唆を与えていると思う。よって、筆者は諸研究が金沢文庫所蔵『浄土論注要文抄』の撰者を長西と推定したことに大過なしと判断したい。そして、上述のことを理由として、現存する著作の少ない長西を研究するにあたり、極めて貴重な史料になり得ると考えるのである。

①石橋誠道著『九品寺流長西教義の研究』（一九三七年、四二頁）では、長西の著作の一つとして、書名を往生論註疑芥、撰者を長西と推定し、安井広度著『法然門下の教学』（一九三八年、三六頁）では、長西の著作一覧に『浄土疑芥』という項目を立て、その中で「『論註』等の鈔を残している」と述べている。

②『浄土宗大辞典』巻三（二六頁）、石田充之著『日本浄土教の研究』（一九五二年、三〇〇頁）、同氏著『法然上人門下の浄土教学の研究』（一九七九年、七八―七九頁）。なお、石田氏は函書において『浄土疑芥』と内題される他の長西著作と同類のもの推定されている。

③その他、『長西論註抄』とも呼称される。（戸松憲千代稿「元興寺智光無量寿経論釈抄」、『宗学研究』巻二四所収・一〇六頁）

④拙稿「金沢文庫蔵『浄土論注要文抄』の諸問題」（『真宗研究』巻五六・二〇一―二二年）

⑤『要文抄』に見られる文体の特徴として、三点を挙げることができる。すなわち、①註釈を施した書物の文言を「：等事」と項目立てて註釈する点、②問答において、問いは「疑云：歟乎」という構文が、答えにおいては、「答：歟」という構文がしばしば見られる点、③項目として立てた『論註』の文言に対して「文点如何」・「文点并意如何」と、読みや意味について問う点である。上記の三点は、金沢文庫より検出された長西の他著作と同様の文章表現である。特に三点目は、『大正蔵』に四例、『浄全』に二例を数えるに止まり、単なる一致と見るには非常に希な表現であるから、文体の一致を裏付けていると言って過言ではない。

⑥石田氏前掲書（一九五二年）、三一―五頁他を参照。

⑦『名体決』は現存する諸本に撰号がないことから、撰者について異説があるが、近年では長西の著作と見て大過なしとされている。そのため、本稿でも長西撰述書として扱った。（吉田淳雄稿「長西の著作について」、『佛教論叢』巻四四・九八―一〇〇頁を参照）

⑧本稿において引用した原文は、字体を旧字に統一し、筆者の読みによって訓点を付した。また、引用文に付した網掛け・太字等の処

理は、筆者の手による加筆である。なお、◇で括った箇所は、原文での割註表記箇所を意味することを、あらかじめ断っておく。

⑨なお、『源流章』に言うところの「観行観」・「観属観」とは、良忠の『観経疏略鈔』に「總観有三義。一、観行の観（定相應の観）也、二、観知の観（心知の観）云々、三、観屬の観（目見）」（『浄全』巻二・四五六頁下）とあるのと同義であろう。したがって、「観行観」とは定善相應の観、「観属観」とは目視の観である。

⑩凝然の説示から長西教義を窺うことの妥当性について筆者の考えを述べておく。『維摩経疏菴羅記』には、

唐朝解釋觀經之師、釋至誠等三心、行相即引起信論、直心等三心、合全一同、以爲往生極樂安心。今經直心等三、全同引起信三心。今經所說一十七事、皆是行業。非是安心。然後十四、即是行業。初三種法、通心及行。昔北洛九品寺長西上人。淨土法門之先德也。予、齡居二十二、往詣彼寺聽講。善導和尚觀經義疏。于時長西大德、年齡七十八。即弘長元年辛酉七月、自恣竟也。西公語予云、觀經三心、維摩經十七事、中初之三心、起信論中所說三心、二經一論所說全同。維摩觀經、竝是淨土門中心行、起信三心、穢土修行、聖道門中習業安心。所同雖異、法體是同。〈云々〉

（『仏全』巻五・二二六頁上）

とあり、凝然は二十二歳の時に、長西の晩年（七十八歳）における『観経疏』講義を聴講している。加えて、長西から直接に教示されていることから、一三二一年に著された『源流章』の長西教義に関する記述は信用に足るものであると考える。もちろん、長西の著作上に見られる思想と相違しないかは注意しなければならないが、殊気にするような点は管見の限り見られない。

⑪善導『観経疏』に、「今此観經、即以觀佛三昧爲宗、亦以念佛三昧爲宗。」（『大正藏』巻三七・二四七頁上）と示される。長西との相違を明確にするために図示すれば、

| | | | | | | |
|----|----|-----|----|----|----|---------|
| 定善 | —— | 観行観 | —— | 観仏 | —— | 宗（単成一宗） |
| 散善 | —— | 観属観 | —— | 念仏 | —— | 宗（単成一宗） |

となり、あくまでそれぞれ単独での宗を認めていると言って良いだろう。

⑫鎮西義派祖の聖光房弁長は『徹選択集』において『選択集』の題号を解釈して、

釋曰、先就^ニ本選擇集ノ之題^ニ此有^ニ三義^一。所謂^ハ第一^ニ本選擇集ノ之題中^ニ言^ハ念佛者、是諸師所立ノ口稱念佛也。故^ニ題次行^ニ言^ハ南無阿彌陀佛也。第二^ニ本選擇集ノ之題中^ニ言^ハ本願者、是善導所立之本願念佛也。故^ニ題次行^ニ言^ハ南無阿彌陀佛也。第三^ニ本選擇集ノ之題中^ニ言^ハ選擇者、是然師所立ノ選擇念佛也。故^ニ題次行^ニ言^ハ南無阿彌陀佛也。是^レ故^ニ本選擇集ノ之題中^ニ雖有^ニ三重念佛ノ之義^一、俱^ニ非^ス觀念ノ之念佛^一、但^テ是^レ口稱念佛^ニナリ也。

（『浄全』巻七・八三頁下）

と述べ、法然が明らかにした念仏とは、口称念仏・本願念仏・選擇念仏の三義を有するが、これに觀念の念仏の意は含まれず、口称念仏の意のみであると定義している。これは法然門下の基本スタンスとも言える理解であり、長西の独自性は明らかであろう。

⑬廣川堯敏氏は、良忠と長西（広く諸行本願義を含む）との関係について、早くから以下の論攷を発表されている。「金沢文庫本『観経疏聞書』と『光明抄』―良忠教学の思想基盤―」（『浄土宗学研究』巻一八・一九九一年）、「然阿良忠と諸行本願義」（『印度学仏教学研究』巻四二・一九九四年）、「初期良忠教学の形成過程―金沢文庫本『観経疏玄義分聞書』第一を中心として―」（『浄土宗学研究』巻二三・一九九六年）また、近年では沼倉雄人氏が「良忠における深心積について―『伝通記』と『光明抄』における「信」の解釈を中心に―」（『仏教論叢』巻五三・二〇〇九年）を発表されている。

なお、良忠は『伝通記』執筆にあたって長西などの浄土異流の著作を集めていたことが、弟子之良心の『授手印決答受決鈔』に記されており（『浄全』巻一〇・八八頁下）、長西との関係は皆無ではないと言える。

⑭石橋氏は前掲書において同文を引用し、「或人」の下に割註で「註には九品寺といふ」と記している（三六頁）。筆者は『浄全』所収本を参照したが、同様の註記を確認することができなかった。石橋氏の参照したのは「三七紙」と出拠が挙げられる点より、刊本または写本と推測され、そこに付された註記と思われる。このような経緯からやや不確定な感は否めないが、他に見られる長西

借りて関係者に甚深の謝意を表したい。

(浄土真宗本願寺派総合研究所研究助手)

